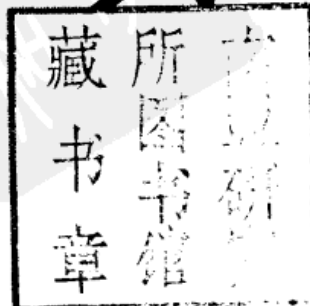


佛書解說大辭典

大東出版社藏版



ISBN4-500-00288-X

昭和8年11月20日 初版発行
昭和39年5月1日 改訂発行
昭和56年10月12日 重版発行

仏書解説大辞典 第一巻
¥ 8000

版權
所有

編纂者 小 野 玄 妙
発行者 岩 野 真 雄
印刷者 村 雲 二 郎

発行所 株式会社 大東出版社

東京都文京区白山1丁目37番10号
電話 (816) 7607

印刷所 株式会社 平 文 社 4384

ISBN4-500-00289-8 C3515 ¥8000E

編纂の趣旨並びに内容について

当社刊行の仏書解説大辞典はその初版については昭和五年末より編集事務を開始し、昭和七年十二月第一巻刊行と共に之を公告し、爾後三カ年 解説の部十一巻を完了し、第十二巻「仏教経典総論（小野玄妙編）」を以てその完結を見た。

初版編纂の当時、全国図書館を始め公私一般書庫等より蒐集せる書籍・論文は実に夥しき数に達し、それを整理して採録せる著書の総数は実に八万六千 四六倍判五千余頁に及び、これに対し執筆者二百十名、編集関係者二十余名の全力を集中して、規模においても、体系内容においても稀に見る大辞典の完成を見るに至つた。従つて、本辞典に収録せる仏教関係の刊行物は、大は一切経に収むる数千の経論より、小は市井に埋もるる一論文のパンフレットに近きものに至るまで、これを挙げるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる写本類に至るまで一切の典籍を収め尽し、これ等の諸典籍一々に内容解説を施し、且つその所在を明示したのである。

更に、今回の再版発刊に当つては、初版に収録せる書目（昭和七年十月三十一日以前に刊行せるもの）以降、この計画に基づき増補第十二巻刊行（昭和卅九年中）に至るまで卅二年間において著述された夥しい仏教関係書全冊を増補巻（第十二、三巻）に網羅し、更にこの増補分

も含めての全巻中の著者別による著書目録を増補分と共に収めて二巻に纏め、併刊する事になつてゐる。(第一版の第十二巻には小野玄妙編「仏教經典総論」を収めたが、各巻内容均斉の都合上之を今回の発行から除いた。)

内 容 細 目 説 明

一、本辞典は邦語・漢語の仏教典籍の全部、約九万余書を収める。即ち、各種の藏經、仏教全書、仏教大系等一般仏教叢書並びに各宗関係の全書、全集類、各大学図書館及び研究所(東大、京大、竜大、谷大、仏大、高野山大、大正大、駒大、立正大、東洋大等)、並びに宮内省図書寮、内閣文庫、上野図書館、その他の一般図書館所蔵のもの、東域伝灯目録、諸宗章疏録、八家請来目録、真宗教典誌、扶桑禅林書目、その他の諸目録より古逸註疏書目、出三藏記集、歴代三宝紀等より偽經、抄經、闕本、失訳經の書目等、あらゆる文献を涉猟し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して九万余の仏教典籍を採録する。

二、本辞典は以上の九万余の典籍を便宜上、五類に分類した。即ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、単行本の古写本、古刊本」「第四類、現在の単行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、その内容解説にあつては前記五類中の第一、第二類、すなわち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認められるものに限り出来る丈、内容そのものについて

詳細なる解説を附した。

三、本辞典の内容解説の形体はその要点を次の十項目とした。すなわち①題名、書名、具名、略名、異名併記。②巻数。③存、欠。④著者又は訳者、生存年代を併記（この項を五十音順に整理して巻末に著訳者索引として収める）。⑤著作年代又は訳出年代。⑥内容解説。⑦末書（注釈書、参考書類）。⑧写刊の年代。⑨現所蔵者、図書館、書庫名。⑩発行所名。以上の十項目である。この十項目中、前記第一、二類は⑧⑨に便益あらしめ、第五類は⑦の注釈書、参考書に重点を置いて研究に有利ならしめた。而して、大蔵経所収の経律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解説が⑥に於て執筆せられ、且つその解説の責任を明かにすべく夫々、執筆者の署名を附記した。四、本辞典の右の如き十項目の内容について一定の方針を示せば左の通りである。

①題名にはすべて日本音、支那音の読み方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるのがそれである。而して日本音の読み方はすべてローマ字法を採用し、一字一字の間に接尾符（——）を附し、全体としては音便慣読法を用い、促音その他の用法は便宜上、南條目錄補正索引（昭和五年刊）に従った。支那音は現在の北京官話の正しい発音に依り、支那音をローマ字に移すにはトマース・ウィード氏の方法に従った。梵藏両語名の記入は主として西藏甘殊爾勘同目錄（大谷大学図書館昭和六年刊）により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照録（赤沼目錄—昭和四年刊）に従った。

②巻数はその典籍の巻数を記したが、丁数の異なる場合あるものは一々、これを附記した。

③存欠については存は現在行われている蔵経の種類別、所収巻数、全書類はその所載巻数を記した。而して各種蔵経及び目錄には左の如く略符号を使用した。且つ、この欄の数字番号は大正新修大蔵経「昭和法宝総目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正—大正新修大蔵経。縮—縮刷大蔵経。卍—卍字大蔵経。卐—統—統蔵経。北—北宋版。南—南宋版。元—元版。明北—

明北版。清—清蔵。麗—高麗版。天—天海版。指—指要録。法—法宝標目。至—至元法宝勘同総録。明南—明南蔵。Nj—南條目録。出三蔵記—出三蔵記集。三宝紀—歷代三宝紀。法経録—衆経目録（法経等撰）。仁寿録—衆経目録（彦惊撰）。静泰録—衆経目録（静泰撰）。内典録—大唐内典録。訳経図紀—古今訳経図紀。武周録—大周刊定衆経目録。開元録—開元釈教録。貞元録—貞元新定釈教目録。仏全—大日本仏教全書。真全—真宗全書。真大—真宗大系。日蔵—日本大蔵経。

④ 著者又は訳者はその人の生存年代を出来る限り精査して各種の史伝、目録、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる参考資料を渉獵して正確を期して、西暦を用いて附記し、又、年号はその人物の生死国によりてその国の年号をとり、一國に生れ他國に死んだものは何れかの一國の年号を用いた。年代中、一線を用い、「年代—年代」なるは生死年を、「年代—は生年」、「—年代」は寂年のみ明らかなるもの、又、両者とも不明にして生存中のある時期明白なるものは「—年代—」として記入した。年時帝世等、すべて明らかならざるも、略々、その時代を推定し得るものはその推定年代に「？」の符号を用いた。僧伝、並に資料中、生年を明記せざるも寂年亨寿の判明しているものはその逆算によつて概ね、これを記入した。生死年代に諸説あるものはその中の一を採用し、若しくは一説として別出したものもある。

⑤ 著作年代は著作若しくは訳出の年号を記入した。

⑥ 内容解説は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釈・伝通の範圍に於て詳記した。略名・異名を有するものは大蔵経・全書類に標題とされた題名の箇所に於て説明した。例えば、クの部「俱舍論」ではその題下に具名「阿毘達磨俱舍論」と記し、詳細なる解説はアの部「阿毘達磨俱舍論」に於てなしたるが如きである。

⑦ 注釈書・参考書は典拠を出来る丈、詳細に調査して列記し、大体製作の年代順に従つて列挙した。

⑧ 写刊の年月、写とあるは写本、刊は刊本で、それ等の出来た年月を示す。

⑨ 現所蔵者、図書館、書庫名は個人所蔵のものは何某蔵とし、図書館所蔵のものはその館名並にその館に於ける書目の番号を記入した。館名の略符は左の通りである。

谷大—大谷大学図書館。竜大—竜谷大学 Lib. 京大—京都大学 Lib. 正大—大正大学 Lib. 駒大—駒沢大学 Lib. 高大—高野山大学 Lib. 京専—京都（東寺）専門学校 Lib. 哲—哲学堂 Lib. 帝国—上野図書館。内閣—内閣文庫。帝室—宮内省図書寮。宝亀院—高野山宝亀院。金剛三昧院—高野山金剛三昧院。宝寿院—高野山宝寿院。宝菩提院—京都宝菩提院。

但し、蔵経・全書・叢書類は一般に現行されているから、所蔵書、発行所名は概ね、これを記入しないこととした。

「注意」尚右方針を以て第一巻乃至第十一巻は既に刊行されたが、発行より卅余年を経過し居るため、図書館番号の多くは変更されているものゝ多いことを特に諒承されたい。

以上

ア

阿東那經

○(日) A-i-na-kyō. (支) O-i-na-ching. (E) A. X. 116 Ajito. & A. X. 15 Adharmo. ③ 中阿含經第四九 (大正一 No. 26. 188)

阿夷比丘經

○(日) A-i-bi-ku-kyō. (支) O-i-pi-chi-ching. ② 1 卷 ③ 缺

⑤ 秦代失譯 ⑥ 〔參考〕 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第四、第一五、貞元錄第六、第二五

阿育王於佛所生大敬信經

○(日) A-iku-o-o-but-su-sho-shō-dai-kyō-shin-kyō. (支) O-yū-wang-yū-fu-so-sheng-ta-ching-hsin-ching. ② 1 卷

⑤ 雜阿含經第二十三卷より抄出 ⑥ 〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一二、開元錄第一六、貞元錄第二六

阿育王獲果報經

○(日) A-iku-o-kyak-kwa-hō-kyō. (支) O-yū-wang-huo-kuo-pao-ching. ② 1 卷 ③ 雜阿含經第二十三卷より抄出 ⑥ 〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一二、開元錄第一六、貞元錄第二六

阿育王經

○(日) A-iku-o-kyō. (支) O-yū-wang-ching. (梵) Asokaavadāna. 大阿育王經 ② 十卷 ③ 存、大正五〇・一三 No. 2043、縮藏一〇、正二六・六一七、

北1018寫、南1031寫、元1030寫、明北1336頃、清1336頃、麗1019寫、天1023寫、指978寫、法1005寫、至1468且、明南1114基、Nj. 1343 ④ 僧伽婆羅(大明四 普通五A. D. 460-524)譯 ⑤ 梁天監一(A. D. 512)

⑥ 僧伽婆羅は扶南國の人、齊國の弘法を開き、舶に隨つて都に至り、正觀寺に住し、求那跋陀の弟子と爲つて、方等を研精し、齊亡んで梁代に至り、天監五年(A. D. 506)を以て召され、同年より普通五年(A. D. 523)に至る間に十部を譯した。本經は、卷一の終りの跋によれば、天監十一年の譯で梵本は天監二年に來朝せる扶南國曼陀羅の獻せるものであつた。歷代三寶記に、更に青王傳五卷を出したといふは誤りで、恐らくは西晉譯と混じつたものであらう。本經は西晉安法欽譯阿育王傳七卷と本異譯で十卷あるけれども、内容は却つて彼よりも少い。本經は九品に分たれてあるが、經の最初の目錄には、第三卷に毗多輪柯因緣の目を缺いて居るので、八品となつて居る。その順序も、内容も、阿育王傳と一致して居るから、内容の記述は、こゝに略して、その差異を擧ぐれば、(一)本經は優波鞠多が都微柯を得て付法入滅せる事に筆を止めてその後に傳にある三惡王の出世と阿育王の現報因緣とを缺いて居る。(二)本經は傳より偈が多い。之を對照して見ると、本經に於て偈とせる部分が、傳に於ては散文となつて居る個所が甚だ多。(三)固有名稱の異なるものがある。例せば阿育王の弟を傳には宿大摩としてあるのが、本經には毗多輪柯とせられてあり、又阿育王の系譜を傳には頻婆娑羅、阿闍世、優陀那跋陀羅、文荼、烏耳、莎破羅、兜羅貴、莎阿菴茶羅、波斯匿、難陀、頻頭婆羅、阿想伽の如き委しきものとしてあり、本經には旃那羅笈多、頻頭婆羅、阿輪柯の如き簡明なものとしてある。王の父を Bindusara とし、祖父を Candragupta とするは、今日學界に通用せられて居る所でこの點に於て經の方がよい。然し佛時代からの王統を見るには、傳の方に顧慮すべきものがある。傳は蓋し、難陀の次に旃那羅笈多を脱せるが如くである。而して難陀と笈多とは、父子の關係が無かつたのである。斯くて傳と經とは、もと一本より出でたものなる事は疑なきも、種々の點に於て相違があるから、並存研究せらるべきものである。本經は最後に、從阿育王因緣、乃至優波笈多入涅槃、外國凡三千一百偈、偈三十二字としてある。これによつて、本經梵本の長さを知る事が出来る。 ⑥ 〔參考〕 三寶記第一、內典錄第四、譯經圖記第四、開元錄第六、貞元錄第九

阿育王經

○(日) A-iku-o-kyō. (常盤大定) 代意譯阿育王經 ③ 存、現代意譯根本佛敎聖典叢書第六 ④ 高島寬我譯

阿育王供養道場樹經

○(日) A-iku-o-ku-yō-dō-jō-kyō. (支) O-yū-wang-kung-yang-tao-chang-shu-ching. ② 1 卷 ③ 雜阿含經の抄出 ⑥ 〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一二、開元錄第

一六、貞元錄第二六

阿育王作小兒時經

○(日) A-iku-o-sa-shō-ni-ji-kyō. (支) O-yū-wang-tso-hsiao-erh-shih-ching. ② 1 卷 ③ 缺 ⑤ 劉宋代失譯 ⑥ 〔參考〕 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第一五、貞元錄第二五

阿育王山志

○(日) A-iku-o-san-shi. (支) O-yū-wang-shan-chih. ② 十卷 ③ 存 ④ 明代郭子章撰 ⑤ 明萬曆四刊 ⑥ 〔駒大〕 (京大、藏二〇・一) (谷大、餘大・三八一八)

阿育王山誌略

○(日) A-iku-o-san-shi-ryaku. (支) O-yū-wang-shan-chih-iao. ② 1 卷或二卷 ③ 存 ④ 明代郭子章撰 ⑤ 明萬曆四刊 ⑥ 〔正大、一〇三三・四〇〕 (龍大、研史) (駒大)

阿育王寺重修舍利殿記

○(日) A-iku-o-ji-jū-shū-sha-ri-den-ki. (支) O-yū-wang-ssū-chung-hsiu-shē-ri-tien-chi. ② 1 卷 ③ 存

阿育王寺佛涅槃日行法詮次

○(日) A-iku-o-ji-but-su-ne-han-nichi-kyō-bō-sen-ji. (支) O-yū-wang-ssū-f-nien-pian-jih-hsing-fa-chuan-tzu. ② 1 卷 ③ 存 ④ 清代齊賢編 ⑤ 寫本(京大、藏二四八・一)

阿育王事蹟

○(日) A-iku-o-ji-seki. ② 1 卷 ③ 存 ④ 森林太郎(萬延元一 大正一一 A. D. 1860-1922) 大村西崖(明治元一昭和二 A. D. 1868-1927) 共編 ⑤ 阿育王が刻せしめた摩崖、石柱、石窟等

の教法論文及び銘文等の記事を基礎とし、南北兩傳の記事を参照して、王の事蹟を究明したもので、年表、銘文の原文を附録してある。

明治四二刊 東京春陽堂

阿育王舍利瑞應集

①(日)A-iku-o-sha-ri-to-zu. ②一卷 ③存 ④龍大、藏・妙然錄 ⑤光緒元刊 ⑥(龍大)京大、藏・二四・一)

阿育王舍利塔圖

①(日)A-iku-o-sha-ri-to-zu. ②一卷 ③存 ④龍大、別置)

阿育王施半阿摩勒果經

①(日)A-iku-o-se-lan-a-ma-rok-kwa-kyō. (支)O-yü-wang-shih-p'an-o-mo-lu-kuo-ching. ②一卷 ③雜阿含經第二十五卷より抄出 ④【參考】出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、武周錄第一二、開元錄第一六、貞元錄第二六

阿育王息壤目因緣經

①(日)A-iku-o-soku-e-moku-in-en-kyō. (支)O-yü-wang-hsi-huai-mu-yin-yüan-ching. 阿育王子法益壤目因緣經、法益壤目因緣經

阿育王子法益壤目因緣經

②一卷 ③存、大正五〇・一七ノNo. 2045、縮藏一〇、北1020食、南1037食、元1032食、明北1030群、清360群、麗1024食、天1028食、指983食、法1007食、至1470執、明南1110所、Nj. 1567 ④曼摩難提譯 ⑤後秦建初六(A. D. 391) ⑥竺佛念の序によれば、尙書令姚弋弋の請により、安定城に於て、梵本の三百四十三首

盧を譯して漢文一萬八百八十首と爲したもので、譯者竺佛念は、晋晉に譯するに、情義實に難いので、或は文を離して義に就き或は正滯して傍通し、或は解を誦人に取り、或は事略して曲備すといつて、韻文の形に譯した苦心を表白して居る。之を數ふるに二千七百四十八句の四句より成るから、正に一萬九千九百九十六首となるのである。歷代三寶紀には、建初二年の譯として居るけれど、經序に従つて六年とすべきであり、藏經には符秦時代としてあるが、建初は後秦の年號である。

内容は、聖王阿育の太子法益は、その目蓮花の如くにて見るもの皆喜悅したので、天眼の號があつた。王の大夫人淨容、之に戀して、その意を遂げざるに怨恨を懷きつゝあつたが、偶々王臣の耶舍なるもの、また太子にふくむ所あり、その雙目を挑げんを深く心に期した。太子の師善念羅漢は、報復の事あらんを洞見し、太子に對して無常の肉眼を恃まず、不壞の天眼を求むべきを慫慂した。時に西北印度乾陀越國石室城が亂れたので、此機に乗じて、淨容夫人と耶舍とは、相計りて阿育王を説得し、太子を出して彼國を治せしめ、因つて太子に失あらしめんを期したが、太子の教化能く治し難きこの國を信服せしめたので、夫人と耶舍とは遂に王の金印を盜みて王命を矯めた秘書を偽造し、遂に法益の雙眼を挑出せしめた。法益は、之が爲に自ら退きて國界を出で棄と善くした彈琴によつて家家に食を乞ひ、國より國に至り、父王の治處に來

り住した。一夜、阿育王は高樓にあつて、この琴聲を聴き、その法益なるを知り、諸臣を鞠問する事によつて、淨容と耶舍との奸計を知り、遂に二人を獄所に送つて燒き殺さしめた。經は、最後に、法益がこの厄に遇へる過去の因縁を説き、以て善惡應報の誤らざるを教へて居る。

經中、阿育大王が法益の北印治化を喜んで、天下を二分して、新頭河表より娑伽國乾陀越城烏特村案に至り、觀浮・安息・康居・烏孫・龜茲・于闐より、秦土に至るまでを、法益に賜與し、而して師子・曼羅・摩竭・金根・維耶・舍衛・毘羅・睡耳など、雪山の北界より、海際に至るまでを、躬ら訓化せんと官つてある所に、當時の印度の國名を知らしむるものがあり、又善念尊者が説ける阿育王の因縁中の善惡應報の相狀に、人心を動かすものがある。

開元錄によれば、經は第三譯のものと云はるゝが、この譯出でし後、前二譯はいつの間にか散佚するに至つたのである。

阿育王太子墳目因緣經

①(日)A-iku-o-tai-fun-e-moku-in-en-kyō. (支)O-yü-wang-tai-fun-huai-mu-yin-yüan-ching. ②一卷 ③缺 ④支婁迦讖譯

阿育王太子墳目因緣經

⑤後漢建和元一(中平三)(A. D. 147-186) ⑥曼摩難提譯阿育王子法益壤目因緣經と同本、第一譯、闕本。 ⑦【參考】開元錄第一、第一五、貞元錄第

一、第二五

阿育王傳

①(日)A-iku-o-den. (支)O-yü-wang-chuan. 大阿育王經 ②七卷 ③存、大正五〇・九九ノNo. 2042、縮藏一〇、出二七・二、北1019食、南1035食、元1031食、明北1452漆、清1452漆、麗1023食、天1026食、指983食、法1006食、至1469執、明南1115基、Nj. 1459 ④安法欽譯

西晉光熙元

①安法欽は、開元錄によれば、武帝(實は景帝)太康二年辛丑(西紀二八二)より、景帝光熙元年丙寅(西紀三〇六)の二十五年に五部を譯した。歷代三寶紀は、竺道祖の晋世雜錄に従つて、之を光熙の年(西紀三〇六)に出せるものとし、開元錄も之に従つて居る。譯の阿育王經と同本異譯でこれは初出である。

本經は七卷十一品に分たれ、その品名は左の如くである。

(一)本施土緣 (二)阿育王本緣傳 (三)阿怨伽王弟本緣 (四)駒那羅本緣 (五)半菴羅果因緣 (六)優波拘多因緣 (七)摩訶迦葉涅槃因緣 (八)摩田提因緣 (九)商那和修因緣 (一〇)優波拘多因緣 (一一)阿育王現報因緣

本施土緣は阿怨伽王が、その昔土妙を佛に供養した小兒の後身として生れたるに筆を起し、頻頭沙羅王の王子として生れ出でて後、得又尸羅國を討伐して功あり、臣民の信賴を得て、兄蘇深摩を討つて王と爲り、初暴惡にして惡阿怨伽の名を得たが、一比丘の奇瑞を見て、心を改めて正法に歸し、

八萬四千の寶塔を造立せんとするの志願を起して、正法阿彌伽の名を得たるを説いたものであり、阿育王本緣傳は優波羅多の化導によつて、佛蹟を巡禮して到る所に塔を立てたるを述べ、阿彌伽王弟因緣は、王は弟宿大弟の不信なるを化せんとて、巧妙なる方便によつて、之を改心せしめたるを述べ、駒那羅本緣は、王子法増が肉眼を捨てて法眼を得たるを述べ、半菴羅果因緣は、八萬四千の寶塔を造立せる大阿彌伽王も、最後は唯半菴羅果の自由あるのみなる悲慘の最後たりし事と、王統の最後の非舍蜜哆王は、大王の施設に反して、佛法を破壊する事によつて、その名を後世に留めんとし、爲に王統の斷絶せる事を述べ、優波羅多因緣は、佛滅百年に摩突羅國に出世せる種多に筆を起して、而して、佛滅後に摩訶迦葉が法藏を結集せる事に説き及び、摩訶迦葉涅槃因緣は、迦葉が法を阿難に付嘱して後、雞脚山中に入定して、彌勒の出世時代を待つに至つた事と、阿難が法を商那和修に付して恒河に入滅せる事を説き、摩田提因緣は阿難の付法を得た摩田提が、彌蘭國に傳道せる事を説き、商那和修因緣は摩突羅國を化導して、優波羅多を度して、入滅せる事を説き、優波羅多因緣は、その化益の實に大なりし事と、提多迦を得て之に付法して入滅せる事を説く外に、阿育王經に無き佛法破壞の三惡王の出現と、佛母摩訶摩耶が天より來下して悲哀せる事を説き、阿育王現報因緣に於て、王が修福する事によつて、龍王を降伏せる事を説いてある。

本經は、その名稱は阿育王傳なれども、その内容は佛滅後の異世の五師たる摩訶迦葉・阿難・商那和修・摩田地・優波羅多の付法相傳と、阿育王の一生とを説いたもので、佛滅一百年の佛教史を包含するものである。中には、舍利八分もあり、第一結集もあり、阿育王の佛蹟巡禮もあり、三惡王もあり、幾多の史實を有する事は疑ない。付法藏因緣傳の如きは、斯る資料を基本として成せるものである。これと阿育王經との關係は、更に同經の下に於て略述する。

ch'eng-chi-ching-fa. ①一卷 ②存、密教軌部ノ内、記續一・三・四 ③唐不空(神龍元一大唐曆 A. D. 705—774)譯 ④この經では觀世音菩薩が佛陀の許を得て、一印三使者の法を説くことに成つて居る。三使者とは天上の使者と虚空の使者と下地の使者とである。この三使者は三災を滅し、三種の執着を滅し、生々世々の業障を滅すると信ぜられて、三使者の各々に眞言と印とがある。この三使者に對して、一印と千類千轉の明とが説示せられ、この印明の加持に依つて、諸病を除癒し得ると言はれてある。

一行も亦、同様に飲食を得たのみならず、かの樹下の人から、無數の金銀珍寶を得て歸り、前には後世の生あることを信じなかつた阿鳩留も、この人の物語を聞いて後世あるべきを思ひ、大に財を施して貧窮を厭はし、死後初利天の一隅に生れたが、その果報は、遠く一乞女の女人(米粥を迦葉に上つて、初利天に生れ、帝釋の近くに座を得た)に及ばざる所以を示さんとしたもの考へられるが、現存の經では、この兩者の福を、僅かに比較する所に終つて、その所以を示すと思はる部分が無い。即ち後佛が母の爲に初利天に昇つて説法せられた時、阿鳩留が、佛に我れ大衆に布施して凡人を得たり、かの乞女の人、僅かに施して此の福有り、と述べる所で終つてゐるので、説話が完成してゐないのを知ることが出来る。

阿育王傳序 ①(日) A-iku-b-den-jo. (支) O-yü-wang-ch'uan-hsu. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・二五・一)

阿育王傳 ①(日) A-iku-b-den-jo. (支) O-yü-wang-ch'uan-hsu. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・二五・一)

阿鳩留經 ①(日) A-ku-ru-kyō. (支) O-chiu-lu-ching. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・二五・一)

阿吽字義 ①(日) A-un-ji-gi. ②一卷 ③存 ④承應元刊(谷大)、元祿一〇刊(龍大)

阿鳩留經 ①(日) A-ku-ru-kyō. (支) O-chiu-lu-ching. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・二五・一)

阿鳩留經 ①(日) A-ku-ru-kyō. (支) O-chiu-lu-ching. ②一卷 ③存 ④寫本(京大、藏・二五・一)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

阿伽羅訶那經 ①(日) A-ka-ra-ka-na-kyō. (支) O-ch'ieh-lo-ho-na-ching. ②一卷 ③存 ④中阿合經第四〇(大正一 No. 26, 159)

【ア】

suma-tan-jō-to-no-ki. ② ① 卷 ③ 存 ④ 寫本(龍大、別圖)

阿含經 ①(日) A-gon-kyō. 現代意譯佛敎經典叢書第二 ②友松圓諦譯

阿含經講義 ①(日) A-gon-kyō-kōgi. ② ① 卷 ③ 存 ④ 安井廣度著 ⑤ 昭和七刊 ⑥ 東京東方書院

阿含口解十二因緣經 ①(日) A-gon-ku-ge-jū-ni-in-en-kyō. (支) O-han-kou-chieh-shih-erh-yin-yuan-ching. 阿含口解、斷十二因緣經 ② ① 卷 ③ 存、大正二五・五三No. 1508、縮藏四、廿二六、六、北1033、南1049、元1045、明北1332、清333、既、麗1029、指988、法1015、至1478、明南1127、Nj. 1339 ④ 安玄共嚴佛調譯 ⑤ 後漢光初四(A. D. 181)

⑥ 斷十二因緣經とも云ふ。十二因緣を簡單に解釋して、十二因緣の本を斷ずることに依つて、生死を離れるものであることを説くを主眼としてゐる、頗る異色ある經典であつて、普通云ふ所の十二因緣を内の十二因緣とし、これに、地・水・火・風・空・種・根・莖・葉・節・華・實を外の十二因緣とし、萬物の生死も亦この外の十二因緣に依るとしてゐる。又後半は全く十二因緣に關係なき人所欲三事、四事不可忍、一切味八種の如き法數様のものを出してゐる。案ずるに、西域地方にて纏められた短經の一つであつて、中に般若經の影響の明かに顯はれてゐるものがあり、般若經が西域地方に渡來流行し

て以後の作であらう。阿含口解とはあるが諸部派の傳持した阿含經及びその系統に屬するものではなく、西域地方の特殊の佛敎を理解する一資料となるものである。

⑦(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第二(赤沼智善)

阿含正行經 ①(日) A-gon-shō-kyō. (支) O-han-cheng-hsing-ching. 正意經 ② ① 卷 ③ 存、大正二・八八三No. 151、縮宿八、廿一四・一〇、北815、南829、元823、明北683、清683、麗819、天818、指786、法804、至1031、卑、明南699、Nj. 687 ④ 安世高譯 ⑤ 後漢建和二年建寧三(A. D. 148—170)

⑥ 本經は一切は心を基本とすること、生死の迷ひは無明を根源とするものなれば、十二緣起の理を明に解るべきこと、心端正ならざるものは五道に墮するが故によく五根を制御すべきこと、更に佛陀自らの捨家棄欲の精進の相を説き五戒を持ち四念處を修すべきこと、その心をよく端すべきことを説かれたもので、又正意經の名が存する。

⑦(參考) 三寶紀第四、內典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第一、第二(林五邦)

阿含正行經 ①(日) A-gon-shō-kyō. (支) O-han-cheng-hsing-ching. ② ① 卷 ③ 失譯 ④(參考) 出三藏記第四法經錄第三

阿含に於ける二諸關係の資料 ①(日) A-gon-ni-o-ke-tu-ni-tai-twan-

kyō. ② ① 卷 ③ 存 ④ 佐藤哲英著 ⑤ 昭和七刊 ⑥ 京都興敎書院

阿含の佛敎 ①(日) A-gon no-buk-kyō. ② ① 卷 ③ 存 ④ 赤沼智善著 ⑤ 大正一〇刊 ⑥ 京都丁字屋書店

阿含部の大觀 ①(日) A-gon-bu-no-tai-kwan. ③ 存、大藏經要義第五

本多日生編 阿婆縛三國明匠略記 ①(日) A-sa-ba-san-goku-myō-shō-yak-ki. ③ ③ 存、續群書類從第八 ④ 承澄(元久二一弘安五 A. D. 1203—1282)記 ⑤ 建治元(A. D. 1275)

⑥ 古來この一書が特に阿婆縛抄中から別行されてゐるのであるが、歴史資料の編纂の一向に少なかつた佛敎徒の間に於て、備忘録錄ながら凡そ佛敎史上の重要人物を網羅したこの書が珍重せられた事を想像するに難くない。殊に有職的故實口傳を載録した事が嬉しがられたものであらう。著者が天台宗の人である爲に、自然天台宗中心の記事が多いが、それにしても印度支那日本三國にわたり、特に日本において多くを記し、我國における佛敎史的著述の先驅をなすものである。

阿婆縛抄 ①(日) A-sa-ba-shō. ② 二百二十八卷 ③ 存、大日本佛敎全書第三五—四一 ④ 承澄(元久二一弘安五 A. D. 1203—1282)撰 ⑤ 仁治三—弘安四(A. D. 1242—1281)

本書は台密の敎相事相の各方面に涉つて漏す所なく抜抄載録したものである。阿婆縛と名

けた所以は密敎は佛部・蓮華部・金剛部の三部を以つて概括すれば餘す所がないから、密敎に關する總てを列記する意によつて本書に名けたものである。本書製作の事由は序によれば「甚深無相の法は空しく上機に譲り、兼存有相の法は權かに劣慧に應ずるなり。故によつて諸祖は垂範の文を抄し、

明匠は次第の記を集む、就中、近古の諸德は或は廣文を拾つて淺智を迷し、或は簡略を好んで三隅の用意を闕く。今は中間を補つて廣略を兼ねんと欲し、竊に師説の大都に就いて、具さに現行の一途を述ぶ。傍らに十篇を列ねて二十要を綜緒す。委しく次第を記して七分に辨別し、斯れを阿婆縛抄と名く。蓋し三部の通號、入修證の門を廣ふすと雖も、佛蓮金三部を出でざるが故なり。抑も淺略も之れを捨てざるは、淺近より深奥に至らんがためなり。極秘も之れを遺さざるは、極理を開して未來に繼がしめんとなり」と。十篇とは行法の歴史及び行法實修に關する順序等を十段に分類したものである。第一、この法を修すべき事。第二、文度

の事。第三、形像の事。第四、道場莊嚴の事。第五、行法の事。第六、護摩の事。第七、行法用意の事。第八、經軌の事。第九、私記の事。第十、卷數の事。次に甘要とはこの十篇の内に於て最も主要なるもの廿ヶ條を擧げたもの。然しながらその條目が明かに記されてゐない。篇目によつて記せば(1)種子(2)三形(3)□□(4)發願(5)勸請印(6)□□(7)根本印明(8)護摩呪(9)番僧呪(10)後加持呪(11)□□(12)相承(13)

名所行設⑩(名庫書) 書藏所現⑪ 月年の刊高⑫ (書考參書釋注) 書末⑬ 說解宮内⑭ 代年作者⑮ 著者⑯ 缺存⑰ 數卷⑱ (名書) 名題⑲ 號略字數

行法(14)五種隨一(15)開合不同(16)行法出處(17)私記(18)口傳(19)支度(20)卷数である。次に現在目録によつて次第を記せば

(第一)諸私記。この下に胎灌記(本末)。金灌記(本末)。合灌記(本末)。離作業(本末)。延曆寺灌頂。兩寺灌頂(上下)。三戒(本末)。水取作法。灌要。曼茶羅供(本末)。胎灌讀衆用意。金灌讀衆用意。三戒讀衆用意。灌頂日記(上下)。許可(上下)。許可日記。修法(本末)。雜事。胎記(本末)。胎諸(本末)胎要。隨行(本末)。金記(本末)。金諸(本末)。金要。三摩地(本末)。合行(本末)。合行別。悉記(本末)。悉記(別)。十八道本末。十八道(別)。護摩(本末)。護摩(別)。護摩(要)。(第二)諸佛。この下に、一切佛。藥師(本末)。七佛藥師(本末)。阿闍。釋迦。無量壽命決定如來。阿彌陀(本末)。五佛頂。大佛頂。金輪。時處。熾盛光(本末)。尊勝(本末)。白傘蓋。佛眼。佛眼初度。二度。三度。孔雀。准胝。舍利。光明眞言。(第三)諸經。この下に、瓊祇經。法花(本末)。華嚴。灌頂經。文殊宿曜。八曼荼羅。一切經。普賢延命(本末)。仁王。請雨。造塔。無垢淨光。寶篋印。寶樓閣。持世。菩提場。(第四)諸觀音。この下に、聖觀音。請觀音。六字(本末)。同河臨(本末)。六字(別)。千手。十一面。馬頭。如意輪。不空羅索。葉衣。大白衣(祕)。多羅。毘俱低。青頸。白衣。大白衣。水月。六觀音合行。(第五)諸菩薩。この下に、普賢。五秘密。文殊五字。一印。文殊六字。一字一誓。威經。文殊八字。令法久住。盧舍藏。求聞

持。明星。五大虛空藏。隨求(本末)。彌勒。地藏。藥王。勢至。龍樹。羯磨。延命。轉法輪。放光。馬鳴。(第六)諸忿怒。この下に、愛染。不動(本末)。降三世。軍荼利。大威德。金剛夜叉。五壇法(本末)。五大尊合行。安鎮(本末)。正鎮作法。支物加持。輪藏供養。受地。安鎮日記(甲乙丙丁)。金剛童子。烏瑟沙摩。大輪。步擲。無能勝。(第七)諸天。この下に、毗沙門。雙身。四天王合行。最勝太子。訶利帝。吉祥天。北斗。星。妙見。摩利支。冰迦羅。常求利。童子經。歡喜天。水歡喜天。施餓鬼。帝釋。火天。炎摩。辨才。羅刹。水天。風天。伊舍那。梵天。地天。日天。月天。迦樓羅。深砂。大黑天神。冥道供(本末)。冥道(別)。七十天。十二天。十羅刹。大師供。山王。玉女。(第八)諸作法。この下に、四種念誦。五色絲。五色絲(左系)。護身。驗者。傳法。三部。授戒。八寶戒。衣鉢。佛經供養。開眼。印佛。食法。睡眠。上廁。澡浴。御衣。佛絹。鑄尊。帶。易產。湯。衣。食。念誦。鈴杵。鞭。受地。(第九)諸雜抄。この下に、通法抄。諸法要略。大日經等要文。義釋要文(上下)。兩經疏要文。菩提心論勘文(上中下、別)。教相雜抄(上下)。一二三名目(上下)。胎藏諸尊釋(上下)。香藥(上下)。教時義勘文(上中下)。正音義。字記正決(上下)。九弄圖問答。次第記雜文料簡。字母表。頌一行。明匠抄(上中下)。三國名所。諸寺略記(上下)。山上諸堂。諸社事。書籍事。已上であるが、治定目録には「尊法百五十。式作法等七十八。都合二百二十八卷。文永

十二年二月日。僧正承澄」とある。享保十四年に叡山雖院天忠の編した私目録は壹百卷とし、他に七佛藥師法。熾盛光(末)は今宗の極秘であるのと、胎灌記の首に而授口決の録であるから此等を別行することにしたといひ、百卷以外に七佛藥師法と熾盛光法とを置き、次に阿婆縛抄序目。三國明匠略記(白毫院圓光上人の類聚なり)。阿婆縛抄事書。阿婆縛抄私目録以上各一卷を添へてある。又日本佛教全書は第三五—四一に至る七冊に本書を収め、最後に總目并諸本存缺一覽を掲げてあるが閱讀に便である。佛教全書によれば掲載項目は序以外二三三項に分れてゐる。本書は承澄が京都の小川禪居で殆んど大部分を編したが、往々關東鎌倉大藏で集記してゐる。又前後約四十年間の採録であるが、錄した年は二十九年だけで時々中絶がある。又承澄以外に尊澄なる者が「書」としてゐる。尊澄は思ふに承澄常侍の弟子か。本書は台密十三流の中では大太流の傳書。然し乍ら諸流皆本書を寫傳して所依の書としてゐる。故に台密の行法を研究する場合には主要なる參考書の一である。

⑦(參考) 本朝台祖撰述密部書目 ①貞和二寫(百三卷)(龍大、二六五八・一)(谷大、餘大・八六九)(京大、二六八・八)(田島德音) ②阿婆縛抄總目録 ①(日)Asa-da-shō-shō-moku-toku. ②一卷 ③存 ④梅崎舜興(一明治四四A.D.1911-)集 ⑤明治四四寫 ⑥(正大、一四〇・三)

阿婆縛抄 ①(日)A-po-ha-shō

②一卷 ③圓珍(弘仁五—寛平三A.D.814—831)撰 ④(參考) 山家祖德撰述篇目集 卷上

阿護兩國興殿免許記 ①(日)A-san-ryō-goku-ko-den-men-kyō-ki. ②1卷 ③存 ④寛政四寫 ⑤(谷大、宗大・二七八六)

阿字義 ①(日)A-ji. ②存、弘法大師全集第一—③空海(實龜五—承和二A.D.774—835)述

①この書は阿字の無相不可得の義を述べたものである。この無相不可得の理は、淨菩提心の對境であり、行者の觀心が淨菩提心と相應一致する時に、行者は我即大日の悟りを得る。行者の觀心が淨菩提心と一致する爲めに、三密の妙行が必要となる。

本書は無相亦不可得義と云ふ句で初て居るが、大師の文として、斯の如き書き方は極めて稀である。恐らく前文の分が脱落したものであるまいかと思はれる。且つ文章も大師の文としては、遺憾の點が尠くは無い。

阿字義 ①(日)A-ji. ②三卷 ③存、大正七・五二一 No.2438 ④實範(一天美元A.D.1144)述

①梵語の𑖀(ア)字の義趣を説明せる書である。阿摩字實相名體事等十四項を分ちて、主として大日經、守護經、善無畏の大日經疏、弘法大師の摩字實相義、即身成佛義及び吽字義、十住心論、安樂の悉曇藏等を引用し、問答を設けて詳細に阿字の義を解説してゐる。阿字は大日經一部の肝要で

眞言宗義の根幹を爲す所の重要な思想である。随つて阿字に關する著書は尠くないが本書の如く詳細に叙述せるものは稀である。其内容項目は阿聲字實相名體事、阿聲字爲一切聲字本體一事、阿聲通一切定惠等聲字一事、一切文字無非阿字一事、阿字悉遍一切情非情法而爲其第一命一事、阿字爲一切眞言之心一事、亦生處住處亦最上又爲一切法教之本亦所詮一事、阿字爲一切理之本一事、阿字爲一切行之要一事、以阿字一統如來無邊果德一事、如來妙感妙應皆不出阿字門一事(以上卷上)、於阿聲字相辨能所詮一事、阿聲字實相之法然隨緣事、阿聲字實相之迷悟損益事(以上卷中)、阿字之字相字義實相之有相無相事(卷中、卷下)の十四項である。かくて阿字の名體を示し、阿字に字相字義淺深の兩釋あること、阿字は諸法本不生の義を有すること等を説き、特に最後の項に於て字相淺略釋の無不非の三義と字義深祕釋の有空不生の三義とにつきて有相無相の義を詳説してゐる。(小田慈舟)

阿字義科文 ①(日) A-ji-gi-kwa-mon. ①一卷 ③存 ④全理(後光明帝代 A.D. 1644—1654)記 ⑤萬治二刊 ⑥(正大、一四三三・一四五五)

阿字義私記 ①(日) A-ji-gi-shi-ki. ②二卷 ③存 ④亮法(元和八—延寶八 A.D. 1622—1630)述 ⑤寛文二刊 ⑥(谷大、餘大・三〇三三)(哲、ま・八・左・一八)(龍大、二六六二・五三)(高、寄・一・六九)

阿字義釋 ①(日) A-ji-gi-shaku. ①阿字義 ②一卷 ③存 ④空海(寶龜五一—

承和二 A.D. 774—835)述

①阿字義の奥書に、阿字義釋一卷として、阿字の功德を讃する頌文が附記してある。この頌文は横尾山全理房の作である。これに依て考ふるに、全理房が高祖の阿字義を、阿字義釋と呼んで居ることが明かである。

①延元元寫(高、寄・一・六九)平安末期寫(高、寄・一・六九) (神林隆淨)

阿字義鈔 ①(日) A-ji-gi-shō. ②一卷 ③存 ④亮法(元和八—延寶八 A.D. 1622—1630)述 ⑤萬治元刊 ⑥(京專)(正大、一四八・五五)(帝國、一・一九七・一四二)

阿字義註訓 ①(日) A-ji-gi-chū-kun. ②一卷 ③英岳(寛永一六—正徳二 A.D. 1639—1712)述 ④(參考) 諸宗章就錄第三

阿字功能抄 ①(日) A-ji-ka-nō-shō. ②一卷 ③存 ④寛文元刊 ⑤(京大、藏・一六・一)

阿字功能鈔 ①(日) A-ji-ka-nō-shō. 再治阿字功能鈔 ②一卷 ③存 ④(高、寄・一・六九)

阿字月輪觀 ①(日) A-ji-gwatsun-rin-kwan. ③存 ④興教大師全集 ⑤覺鑒(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143)著

①大日經義釋から、阿字月輪觀に關する要文を略抄したもので、阿字觀を實修する行者の修禪用心の目的で、集録されたものと、阿字月輪觀の要義は、悉く此の中に明されてあるから、阿字の禪觀者に取り、必讀の文である。但しこの文中に唯願彌陀垂加持の四句一偈が出てゐるが、これ亦上人の彌陀に對する特異なる思想の存する所を窺ふに足るものがある。

⑦(參考) 諸宗章疏錄第三 (神林隆淨)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ③存 ④興教大師全集、密嚴諸秘釋第一 ⑤覺鑒(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143)述

①この阿字觀に偈文と散文とあり、偈文は阿字觀の空觀にて生死の妄見を斬り除く意を示し、散文に於ては阿字觀の實修方法が明されてある。上人は行住坐臥常に阿字觀を修して居られたと言はれて居るが、その説は今の阿字觀の散文の上にも明に見えてある。

⑦(參考) 諸宗章疏錄第三 ①元祿三寫、二部二帖(高、寄・一・六九)、天明三寫、一帖(高、寄・一・六九)(哲、け・二・右・七)(神林隆淨)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一卷 ③存 ④高辨(承安三—貞永元 A.D. 1173—1232)一説貞永元年六一寂述 ⑤刊本(正大、一四八・二一四)安永九寫(高、寄・一・六九)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一帖 ③存 ④道範(元暦元—建長四 A.D. 1184—1252)述 ⑤足利時代寫、徳川時代寫 ⑥(寶龜院、本・俗)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一帖 ③存 ④聖憲(徳治二—明德三 A.D. 1307—1392) ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院、本)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一卷 ③存 ④良尊(元和之頃 A.D. 1615—1623)述 ⑥(京專)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. 三世安樂集 ②一卷 ③存、念佛安心篇之内 ④玄定述 ⑤延寶五寫 ⑥(谷大、餘大・二〇二〇)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一帖 ③存 ④覺道(天保四—明治三八 A.D. 1833—1905) ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院、俗)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一卷 ③存 ④嘉應元寫 ⑥(金剛三昧院、六)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑥(寶龜院、琅)

阿字觀 ①(日) A-ji-kwan. ②一帖 ③存 ④明治八寫 ⑥(高、寄・一・六九)

阿字觀附阿字義阿字功能 ①(日) A-ji-kwan-tsu-ketari-A-ji-gi-ka-ji-ka-nō. ②一帖 ③存 ④寶永五寫 ⑥(金剛三昧院、六)

阿字觀并黑護符加持 ①(日) A-ji-kwan-narabini-Kuro-go-in-ka-ji. ③三帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑥(寶龜院、何)

阿字觀口訣 ①(日) A-ji-kwan-ku-ketsu. ②一卷 ③存 ④良俊撰

阿字觀口訣 ①(日) A-ji-kwan-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④覺鑒(嘉保二—康治二 A.D. 1095—1143)述 ⑤徳川時代寫 ⑥(寶龜院、本)(高、寄・一・六九)

阿字觀口訣 ①(日) A-ji-kwan-ku-ketsu. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑥(寶龜院、本)

阿字觀功能鈔 ①(日) A-ji-kwan-ka-nō-shō. ②一卷 ③存 ④定辨(承安三—貞永元 A.D. 1173—1232)一説貞永元

年六一寂)述 ①(龍大・二六六七・二)

阿字觀空現感章 ①(日) A-ji-kwan-
kwan-ku-gen-kan-shō. ②一帖 ③存

明和二寫 ④(金剛三昧院・六)

阿字觀音言鈔 ①(日) A-ji-kwan-
go-gon-shō. 阿字觀鈔・病中寓言抄 ②一
卷 ③存 ④聖憲(延慶元一明徳三A.D.
1308-1392)述 ⑤承應二刊 ⑥(谷大・餘
大・三〇三二)(龍大・二六六七・一)(高
大・一・六九)

阿字觀御消息 ①(日) A-ji-kwan-
go-shō-soku. ②一帖 ③存 ④延徳二
寫 ⑤(金剛三昧院・六)

阿字觀作法 ①(日) A-ji-kwan-sa-
hō. ②一巻 ③存 ④理觀述 ⑤延寶五
(A.D. 1677)

阿字觀私記 ①(日) A-ji-kwan-shi-
-ki. ②一巻 ③存 ④淨嚴(寛永一六一元
禄一五A.D. 1639-1702)述

阿字觀私記 ①(日) A-ji-kwan-shi-
-ki. ②一帖 ③存 ④月海(一寛延三A.
D. 1750)撰 ⑤寛延元寫 ⑥(高)

阿字觀私作法 ①(日) A-ji-kwan-
shi-sa-hō. ②一枚 ③存 ④(高)大・一・
六九)

阿字觀私集 ①(日) A-ji-kwan-shi-
-shū. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤
(寶龜院・本)

阿字觀私法則 ①(日) A-ji-kwan-
shi-ho-soku. ②一帖 ③存 ④寫本(高
大・寄・一・六九)

阿字觀修生記 ①(日) A-ji-kwan-
shu-shō-ki. ②一帖 ③存 ④明和四寫
⑤(高)大・寄・一・六九)

阿字觀正訣 ①(日) A-ji-kwan-shō-
-ketsu. ②一巻 ③存 ④月海(一寛延三
A.D. 1750)撰

阿字觀消息 ①(日) A-ji-kwan-shō-
-soku. ②一冊 ③存 ④道範(元暦元一
建長四A.D. 1184-1252)述 ⑤徳川時代
寫 ⑥(寶龜院・龍)

阿字觀鈔 ①(日) A-ji-kwan-shō.
②一巻 ③存 ④信證(應徳三一康治元A.
D. 1086-1142)記

阿字觀鈔 ①(日) A-ji-kwan-shō.
②一帖 ③存 ④融源(高倉帝代A.D. 1169
-1181)述 ⑤寫本(高)大・寄・一・六九)

阿字觀鈔 ①(日) A-ji-kwan-shō.
阿字觀寓言鈔・病中寓言鈔 ②二巻 ③存
④聖憲(延慶元一明徳三A.D. 1308-1392)
述 ⑤(正)大・一四八・五七)(高)大・一・六
九)

阿字觀鈔 ①(日) A-ji-kwan-shō.
②二巻或一巻 ③存 ④良尊(一元和二A.
D. 1616)述 ⑤寛文一三刊 ⑥(谷大・餘
大・二六五九)(龍大・二六六七・三)(京專
(正)大・一四七・五六)

阿字觀鈔 ①(日) A-ji-kwan-shō.
②一巻 ③存 ④亮汰(元和八一延寶八A.
D. 1622-1690)述 ⑤(京專)(正)大・一四
八・五五)

阿字觀節解 ①(日) A-ji-kwan-
setsu-ge. ②一巻 ③存 ④聖憲(延慶元
一明徳三A.D. 1308-1392)說 華海解

刊本(正)大・一四八・四九一五二・一四八・
二一八)(京專)(谷大・餘大・二六六〇)(龍
大・二六六七・四)

阿字觀節解昨夢鈔 ①(日) A-ji-
kwan-setsu-ge-saku-mu-shō. ②一巻
③存 ④圓融述 ⑤元祿一一刊 ⑥(龍大・
二六六七・五)(高)大・寄・一・六九)

阿字觀前行用心 ①(日) A-ji-kwan-
zen-gyō-yō-jin. ②一巻 ③存 ④寫本
(正)大・一四八・三四)

阿字觀相 ①(日) A-ji-kwan-sō.
③存・慈雲尊者全集第一六 ④菩提華記・
慈雲(享保三一文化元A.D. 1718-1804)撰

阿字觀頓覺章 ①(日) A-ji-kwan-
ton-gaku-shō. 阿字頓覺章 ②一巻 ③存
④惠淨(後西院帝代A.D. 1655-1662)述
⑤(高)大・寄・一・六九)

阿字觀之事 ①(日) A-ji-kwan-no-
-koto. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤
(寶龜院・本)

阿字觀秘決集 ①(日) A-ji-kwan-
hi-ketsu-shū. ②三巻 ③存 ④常密雲集
⑤(高)大・一・六九)(京專) ⑥香川縣定光院

阿字觀秘傳鈔 ①(日) A-ji-kwan-
hi-den-shō. ②一巻 ③存 ④聖憲(延
慶元一明徳三A.D. 1308-1392)述 ⑤徳
川時代寫(寶龜院・經)・寫本(正)大・一四八・
六四)

阿字觀秘要集 ①(日) A-ji-kwan-
hi-yō-shū. ②一六種 ③寫本(谷大・長
保・二一〇)

阿字觀槍尾記 ①(日) A-ji-kwan-
hino-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫
⑤(寶龜院・中)

阿字觀槍尾傳 ①(日) A-ji-kwan-
hino-oden. 阿字觀用心口決 ②一巻 ③
存 ④寛文八寫 ⑤(金剛三昧院・六)

阿字觀法則 ①(日) A-ji-kwan-hō-
-soku. ②一巻 ③存 ④妙瑞述 ⑤元文
二(A.D. 1737)

阿字觀法に對する末章疏 ①(日) A-ji-kwan-hō-
shō-shō. ②一巻 ③存 ④寫本(高)大・一・
六九)

阿字觀門 ①(日) A-ji-kwan-mon.
(支) O-izhi-kuan-men. 大毘盧遮那經阿闍
梨眞實智品中阿闍梨住阿字觀門 ②一巻
③存 ④大正一八・一九三No. 863 ⑤正續二・
九四 ⑥唐惟謹(文宗代A.D. 827-840
一)撰 ⑦(參考) ⑧入唐新求聖教目錄

阿字觀用意 ①(日) A-ji-kwan-yō-
-i. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜
院・本)

阿字觀用心口決 ①(日) A-ji-kwan-
yō-jin-ku-ketsu. 阿字觀槍尾傳・阿字槍
尾記 ②一巻 ③存 ④大正七・七四一五
No. 2432. 阿字觀秘決集之内 ⑥實慧(延
曆五一承和一四A.D. 786-847)撰
⑦著者實慧僧都河内檜尾觀心寺に隱棲せ
る故に所住地に因みて阿字觀槍尾傳等の異
名がある。
本書は著者受法の師たる弘法大師の口決
に基づいて、阿字觀の用心とその修觀法を述
べたものである。阿字觀に廣略二觀あるこ

阿字觀槍尾傳 ①(日) A-ji-kwan-
hino-oden. 阿字觀用心口決 ②一巻 ③
存 ④寛文八寫 ⑤(金剛三昧院・六)

阿字觀法則 ①(日) A-ji-kwan-hō-
-soku. ②一巻 ③存 ④妙瑞述 ⑤元文
二(A.D. 1737)

阿字觀法に對する末章疏 ①(日) A-ji-kwan-hō-
shō-shō. ②一巻 ③存 ④寫本(高)大・一・
六九)

阿字觀門 ①(日) A-ji-kwan-mon.
(支) O-izhi-kuan-men. 大毘盧遮那經阿闍
梨眞實智品中阿闍梨住阿字觀門 ②一巻
③存 ④大正一八・一九三No. 863 ⑤正續二・
九四 ⑥唐惟謹(文宗代A.D. 827-840
一)撰 ⑦(參考) ⑧入唐新求聖教目錄

阿字觀用意 ①(日) A-ji-kwan-yō-
-i. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜
院・本)

阿字觀用心口決 ①(日) A-ji-kwan-
yō-jin-ku-ketsu. 阿字觀槍尾傳・阿字槍
尾記 ②一巻 ③存 ④大正七・七四一五
No. 2432. 阿字觀秘決集之内 ⑥實慧(延
曆五一承和一四A.D. 786-847)撰
⑦著者實慧僧都河内檜尾觀心寺に隱棲せ
る故に所住地に因みて阿字觀槍尾傳等の異
名がある。
本書は著者受法の師たる弘法大師の口決
に基づいて、阿字觀の用心とその修觀法を述
べたものである。阿字觀に廣略二觀あるこ

阿字觀槍尾記 ①(日) A-ji-kwan-
hino-ki. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜
院・本)

阿字觀槍尾傳 ①(日) A-ji-kwan-
hino-oden. 阿字觀用心口決 ②一巻 ③
存 ④寛文八寫 ⑤(金剛三昧院・六)

阿字觀法則 ①(日) A-ji-kwan-hō-
-soku. ②一巻 ③存 ④妙瑞述 ⑤元文
二(A.D. 1737)

阿字觀法に對する末章疏 ①(日) A-ji-kwan-hō-
shō-shō. ②一巻 ③存 ④寫本(高)大・一・
六九)

阿字觀門 ①(日) A-ji-kwan-mon.
(支) O-izhi-kuan-men. 大毘盧遮那經阿闍
梨眞實智品中阿闍梨住阿字觀門 ②一巻
③存 ④大正一八・一九三No. 863 ⑤正續二・
九四 ⑥唐惟謹(文宗代A.D. 827-840
一)撰 ⑦(參考) ⑧入唐新求聖教目錄

阿字觀用意 ①(日) A-ji-kwan-yō-
-i. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜
院・本)

とを説き、菩提心の種子たる又阿字とその三昧耶形たる蓮華と月輪とを觀じて、自心の佛性を開顯することを示してゐる。阿字觀に關する著書は東密台密を通じて數百種の多きに上るが、本書はその最も主要なるもので、後世東密の僧徒が編める阿字觀次第は多く本書を所依としてゐるのである。

〔注釋〕 惠照、阿字繪尾記授要鈔二卷(延寶元年作、同二年刊)、同阿字繪尾祖策一卷(延寶五年作、同年刊) (小田慈舟)

阿字觀用心秘密阿字觀作法

①(田) A-ji-kwan-yō-jin-hi-mitsu-a-ji-kwan-sa-hō. ②一帖 ③存 ④足利時代寫 ⑤(寶龜院、本)

阿字觀要訣 ①(田) A-ji-kwan-yō-keisu. ②一卷 ③存 ④慧光(寛文六・享保一九 A. D. 1665-1734)述 ⑤寫本

阿字觀略作法 ①(田) A-ji-kwan-ryaku-sa-hō. ②一帖 ③存 ④徳川時代寫 ⑤(寶龜院、本)

阿字觀略作法依繪尾口訣

①(田) A-ji-kwan-ryaku-sa-hō-e-hino-o-ku-keisu. ②一帖 ③存 ④寛順(一元祿四 A. D. 1691-)述 ⑤文政五寫 ⑥(寶龜院、西)

阿字觀略述

①(田) A-ji-kwan-ryaku-jutsu. ②一卷 ③存 ④月海(一寛延三 A. D. 1750)述

阿字觀略註

①(田) A-ji-kwan-ryaku-chū. ②一卷 ③存 ④英嶽(寛永一六・一正徳二 A. D. 1639-1713)述 ⑤寶

永七刊 ①(龍大、二六六七・六)(正大、一四八・五六)

阿字觀略法

①(田) A-ji-kwan-ryaku-hō. ②一帖 ③存 ④寫本(高、寄・一・六九)

阿字偈

①(田) A-ji-ge. ②一卷 ③圓珍(弘仁五・寛平三 A. D. 814-891 一説寛平四寂)述 ④(參考) 本朝台祖撰述密部書目

阿字決

①(田) A-ji-keisu. ②一卷 ③存 ④曼寂(延寶二・寛保二 A. D. 1674-1742)述 ⑤元文三(A. D. 1738)

阿字玄々觀

①(田) A-ji-gen-gen-kwan. ②一卷 ③存 ④山縣玄澄(慶應二・明治三六 A. D. 1866-1903)述 ⑤明治三六刊 ⑥(高、寄・一・六九)(龍大、二六六七・七) ⑦高野山光明院

阿字今無禪師語錄

①(田) A-ji-kom-mu-zen-ji-go-roku. (支) O-tzō-chin-wu-ch'an-shih-yō-ju. 海幢阿字今無禪師語錄 ②二卷 ③存 ④清代今無述 ⑤(參考) 禪籍目錄

阿字根本增加事

①(田) A-ji-kom-pōn-zō-ka-no-koto. ②一帖 ③存 ④文正二寫 ⑤(寶龜院、相)

阿字贊語

①(田) A-ji-san-go. ③存、傳教大師全集第四、天台體操六之一(大日本佛教全書第一二六)

④本書は大日經住心品所説の意を記したものである。阿字贊語とは、阿字觀の贊語と見られる。文曰「と最初から記してゐるが如何なる書から採抄したものか不明。恐く大日經

に關する章疏から取意採萃したもの。但し偽撰とすべき點が認められないから傳教大師最澄の親撰として置くべきか。(田島德音)

阿字釋

①(田) A-ji-shaku. 阿字秘釋 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四天台小部集釋之内 ④圓珍(弘仁五・寛平三 A. D. 814-891 一説寛平四寂)述 ⑤(參考) 本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

阿字抄

①(田) A-ji-shō. ②一卷 ③存 ④成身院述 ⑤嘉祥三寫 ⑥(高、寄・一・六九)

阿字心續生直指

①(田) A-ji-shin-zoku-shō-jiki-shi. ②一卷 ③存、眞言律住戒義之附錄 ④法操述 ⑤寫本(谷大、餘大・三四一七)

阿字頓覺章

①(田) A-ji-ton-ekaku-shō. 阿字觀頓覺章 ②一卷 ③存 ④惠淨(後西院帝代 A. D. 1653-1663)述 ⑤寛文一〇刊 ⑥(龍大、研佛)(正大、一四八・六六)(高、寄・一・六九)(谷大、餘大・三四〇八)

阿字祕釋

①(田) A-ji-hishaku. 阿字釋 ②一卷 ③存、大日本佛教全書第二四天台小部集釋之内、同第二八智證大師全集第四、日本大藏經天台宗密教章疏第一、天台小部集釋第七、第一八 ④圓珍(弘仁五・寛平三 A. D. 814-891 一説寛平四、年七八寂)撰 ⑤唐大中二(A. D. 858)

⑥本書は阿字が法華經體であることを示した者。法華經は阿字を表顯するばかりでなく、妙法蓮華經の始めから作禮而去の終りに至る文々句々が皆悉く阿字本不生の理を示したものであるといふ。此の如き説は大日經義釋に既に述べてあるが、圓珍は特に大日法華の融會を力説したから本書の如きものが作られたのである。乍然、本書は圓珍の撰述ではないと思ふ。その理由は本書の記述を他書に比較して甚だ明瞭を缺き又卷末に「大中十二年六月十四日天台に於て記す」とあるが、圓珍は六月八日には既に乗船發航し歸國の途についてゐる。此等によつて本書は偽撰といつても誤りではあるまい。本文は三段より成る。總標・別釋・結合がそれである。總標を序分とし、別釋を正宗分とし、結合を流通分として阿字の義門を明す。先づ總標では法華の經題から始めて作禮而去の最後に至るまで一經の始終が悉く阿字本不生の理を述べてゐるといひ、大略の要旨は序分に説かれてゐるとなし、次に別釋では阿字と法華との關係を阿字の四義によせて記す。阿字本不生には四種の義乃至無量の理を具してゐる。四義とは平等・本誓・除障・驚覺である。法華經の正宗分に於てこの四義が表顯されてゐる。方便品の四一の開顯は正しくは平等を説き傍らに餘の三を含み、火宅喻は正しくは本誓を説き傍らに餘の三を含み、窮子化城は正しくは除障を説き傍らに餘の三を示し、雲雨五百は正しくは驚覺を説き傍らに餘の三を説く、迹門の流通分は皆この四義を末法に流布し、本門の正宗分たる久遠の壽量は本地の曼荼羅を顯し、壽量の三世常住は正しく妙法蓮華の最深秘處たる大日如來の常心

地である。この妙法は佛が自ら説くに非ざれば人の知るものがない。故に妙經は佛自説の法である。分別功德品以下の諸品は流通分であつて、各品皆阿字の四義を明し、今世に五智を圓證し父母所生の肉身にして頓に成佛し、法流長く傳へて末法の修道の成じ易きことを勸勵するのである。されば藥王妙音觀音の諸大士は東西各方より集つて供養守護し、陀羅尼を以つて持者の諸難を除き普賢菩薩は四法を世尊に請ひ、阿字不生の妙法即ち之自心なりと覺らしめて、阿字妙法の流通やむ時がない。ここに知る法華一經は悉くこれ阿字本不生の妙法體、阿字の妙法は即ち衆生内心の法である。もし我が心を覺ればそのまゝ普賢であり、大日遍一切處である。この故に大日如來は妙法蓮華經の題目である。願くは諸の行者幸に察思せよ。信も毀も究竟して蓮華臺に坐せよ。八葉は正圓にして増減がない。自受法樂であるから無所得である。南無妙法蓮華經と。これが本文の綱領である。これに依つて知る如く、本書は述門の正宗を以て阿字を別釋し、本門の久遠本地の開顯を大日如來の本地身であるとし、本述の流通分を以て第三の結合とし、阿字即妙法なる義を末法の劣機に勸めて速疾頓證の修道を成就せしめる究竟の法門であるといひ、法華大日一體義を述べ、更に唱題成佛義にまで論歩を進めんとする。これ明かに日蓮宗義が發生する萌芽であつて、同時に又本書製作の年代を推定すべき暗示をなすものといへる。この説が園城寺學僧の間から發

生したものとすれば日蓮義が山門の惠心檀那の本覺思想より稟承したものと云ふ從來の學說を修正すべき重要な論文となる。又本書の思想と相通するものが傳教大師の著作中にも存するがこれも注意を要する。所以は慈覺大師にはこの思想がなく、傳教大師と智證大師とに此の思想があることになるからである。要するに本書は學界から注目せらるべき重要書である。

②(參考) 山家諸祖撰述目錄、祖釋目錄、山家祖德撰述篇目集卷上 (田島德音)

阿字祕釋 ①(日) A. J. H. shaku. ②一卷 ③存、大正七九・八ノ。2512。密嚴諸祕釋 ①覺饒(嘉保二一康治二A.D. 1935—1143)述

⑥本書は阿字本不生の義を述情表徳の二方面より祕釋し、特に表徳の方面に於て、本不生の十義を擧ぐ、一には如實知自心の義なり、二には一切衆生本來佛の義なり、三には一實の境界即ち中道の義なり、四には正覺等至の義なり、五には自性清淨の義なり、六には三句の義なり、七には法應化の義なり、八には不二大乘三諦の義なり、九には三密の義なり、十には體宗用の義なりとし、種々の經軌論釋を引證して阿字本不生の祕義を釋されたものである。尙同名異本あり、一は賴瑜師の阿字祕釋三卷、圓珍師の阿字祕釋一卷、瑜公の阿字祕釋は誦持門、觀字門、解字門の三門に分ちて阿字觀法并に字義を釋し、智證大師圓珍の阿字祕釋は法華經一部八卷は阿字本不生の理を詳説したるものにして、阿字を除きて他に

説く所なきことを説述されたものである。阿字に關する祕口次第等は東台二密に亘りて殆ど其の數知ること能はず、東密に於て百數十部現存するやうである。

(高井觀海)

阿字祕釋 ①(日) A. J. H. shaku. ②三卷 ③存 ④賴瑜(嘉祿二—嘉元二A.D. 1236—1304)述

①(大綱) 最初に阿字は萬法の體性、諸佛能生の根源であるから、行者若し阿字を觀じて、その實義に諦達すれば、五蓋の惑障忽に滅し、實の如く自心の本源を知り、無量の福智を成就し、本有の白蓮自然に開敷して、父母所生の肉身に、速に大日法身の位を證する旨を明し、次に誦持・觀字・解字の三門に分ちて、阿字觀及び阿字の字相・字義を釋述す。

〔内容〕阿字觀に關して、誦持門と觀字門との二つがある。

誦持門とは口に阿字を誦し、心に阿字を觀じて出入息、皆謬誤なからしむるを云ふ。次に觀字門とは明かに阿字の形相を觀ずるを云ふ。即ち阿字を觀ずる場合には、身内の干栗心(Hridaya肉團心)を以て、八葉白蓮と觀じ、質多心(Citta應知心)を以て、圓滿淨月輪と觀じ、この上に阿字を炳現せしむ。次に本章の圖は胎藏法に依らば、蓮華の上に月輪を描き、その中に阿字あり、若し金剛界法に依らば、月輪中に蓮華あり、蓮華の上に阿字ありと觀する。阿字觀が成熟して、宇宙法界悉く阿字と成れば、內障も外障も俱に本不生の理に歸して、煩惱

と菩提、若しくは生死と涅槃との隔執を除き、斯くして速に成佛することを得るに至る。次に阿字觀を成就した數候は、阿字を續見するか常見するかに依つて異なる。續見を地前位と爲し、常見を地上位と稱する。行住坐臥四威儀の間に常に阿字を觀ずるに至れば、阿字に即して萬有を見、又萬有に即して阿字を觀るに至るから、心境互融し、卷舒自在を得るに至る。此の境致に到達して始て阿字觀を成就したと稱するのであるとの旨が本書に示されてある。

②(參考) 諸宗章疏錄第三 ④慶長頃刊(京大、日大未・四一八) 承應二刊(正大、一四八・六五) 龍大、二六六・二五四(京大) 高、大、寄・一六九(天正一〇寫(寶龜院、本)) (神林隆淨)

阿字祕密數息觀 ①(日) A. J. H. shaku. ②一卷 ③存 ④道範(元暦元—建長四 A.D. 1184—1232)述

⑤寛文一二寫 ⑥(金剛三昧院、本)

阿字槍尾記授要鈔 ①(日) A. J. H. shaku. ②二卷 ③存 ④惠照(一延寶元 A.D. 1673—)述 ⑤延寶二寫(谷大、餘大六三九) 延寶三刊(龍大、研佛)(京大、日大未・四二〇) (高、大、一六九) 金剛三昧院、六)

阿字槍尾禪策 ①(日) A. J. H. shaku. ②一卷 ③存 ④惠照(一延寶元 A.D. 1673—)述 ⑤延寶五刊 ⑥(谷大、餘大・二九五六) (龍大、二六六・七・九) (哲、け・二・右・五) (高、大、寄・一六九) (正大一四八・四二、一四八・六一、一四八・六二)

(高六、一・六九)

阿字楡尾禪鈔 ①(日)A-ji-hino-o-zen-shō ②一卷 ③存 ④(高六、一・六九)

阿字不生抄 ①(日)A-ji-fu-shō ②一卷 ③存 ④知道述 ⑤明應八

寫 ①(谷六、餘三・三七)

阿字摩多體文之事 ①(日)A-ji-mo-ta-fai-mon-no-ko-to ②一帖 ③存

天文二四寫 ①(寶龜院、藤)

阿字門即身成佛義章 ①(日)A-ji-mon-soku-shin-jō-butsu-gi-shō ②一卷 ③存 ④曼藏(延寶二)寛保二 A.D. 1674-1742 述 ⑤寫本(龍大、研佛)

阿字要略觀 ①(日)A-ji-yō-ryaku ②一卷 ③覺鏡(嘉保二)康治二 A.D. 1093-1143 述 ④(參考) 諸宗章疏錄第三

阿字要略觀 ①(日)A-ji-yō-ryaku ②一卷 ③存 ④大正七・五五 一 No. 2439 ⑤實範(一天養元 A.D. 1144)述

阿字觀に關する書で、初に阿字を修するに身語意の三業あること、その意業たる觀行に能詮の字を觀すると、所詮の義を觀するとの二種あることを説き、次に前者に色の文字即ち阿字の形を觀すると、聲の文字即ち阿の聲を觀すると二種あること、後者には一義、二義、三義、百二十義等阿字の義に多義ありてその觀法も多義に互ることを示してゐる。而して普通には阿字の字義を有空不生の三義とする故に、今もこの三義につきて觀ずべしと云ひ、蓮華内に月

輪を置きその上に阿字を觀する觀法の法則を述べ此の阿字觀が即身成佛頓悟の法門なることを明してゐる。同人の著たる阿字義は正しく阿字そのものの解説を試み、此の要略觀は専ら阿字の觀法につけて述べたものである。

⑤鎌倉初期寫(高六、一・六九)(京大、日大末、四一六)

阿字略注 ①(日)A-ji-ryaku-chū ②一卷 ③曼藏(嘉保二)康治二 A.D. 1095-1143 述 ④(參考) 諸宗章疏錄第三

阿字了義章 ①(日)A-ji-ryō-gi-shō ②一卷 ③存 ④惠淨(後西院帝代 A.D. 1665-1662)述 ⑤(谷六、餘大・二九五)

阿質國王經 ①(日)A-shitsu-koku ②一卷 ③(支)O-chih-kuo-wang-ching ④阿質王經 ⑤一卷 ⑥缺 ⑦支謙譯 ⑧吳黃武二一建興二(A.D. 223-253) ⑨(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一五、貞元錄第二五

阿濕貝經 ①(日)A-shitsu-bai-kyō ②一卷 ③(支)O-shih-pei-ching ④(日)M. 70 Kīngiri ⑤存 ⑥中阿含經第五(大正一 No. 26, 195)

阿叉鈔 ①(日)A-sha-shō ②二十一卷 ③存 ④泉實(德治元)貞治元 A.D. 1306-1362 述 ⑤觀實(一貞和三 A.D. 1347-1362)記 ⑥永正二寫 ⑦(谷六)(京專)

阿叉羅帖 ①(日)A-sha-ra-jō ②五卷 ③存 ④宗淵集 ⑤天保八刊(龍大)折

本(正大、一四六・一一)木版(谷大)

阿差末經 ①(日)A-sha-ma-kyō ②一卷 ③(支)O-ch-a-mo-ching ④阿差末菩薩經、阿差末菩薩品、無盡意經、無盡意品 ⑤四卷 ⑥缺 ⑦支謙譯 ⑧吳黃武二一建興二(A.D. 223-253)

⑨竺法護譯阿差末菩薩經と同本、第二譯、同本

⑩(參考) 法經錄第一、仁壽錄第二、武周錄第二、開元錄第二

阿差末菩薩經 ①(日)A-sha-ma-bo-rak-kyō ②一卷 ③(支)O-ch-a-mo-p'u-sa-ching ④四卷 ⑤缺 ⑥維祇難譯 ⑦吳黃武三(A.D. 224) ⑧竺法護譯阿差末經と同本、第一譯、同本 ⑨(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

阿差末菩薩經 ①(日)A-sha-ma-bo-rak-kyō ②一卷 ③(支)O-ch-a-mo-p'u-sa-ching ④阿差末經、阿差末菩薩品、無盡意經、無盡意品 ⑤四卷 ⑥缺 ⑦支謙譯 ⑧吳黃武二一建興二(A.D. 223-253) ⑨竺法護譯阿差末菩薩經と同本、第二譯、同本

阿差末菩薩經 ①(日)A-sha-ma-bo-rak-kyō ②一卷 ③(支)O-ch-a-mo-p'u-sa-ching ④(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

阿差末菩薩經 ①(日)A-sha-ma-bo-rak-kyō ②一卷 ③(支)O-ch-a-mo-p'u-sa-ching ④(梵)Aksayamati-sūtra ⑤(藏)Blo-gros-mi-zad-pas bstan-pa ⑥阿差末經、阿差末菩薩品、無盡意經、無盡意品 ⑦七卷 ⑧存 ⑨大正一三・五八三 No. 403 ⑩縮玄五、中七、一、北72周、南72周、元60周、明北70伐、清70伐、廢70罪、天71周、指01罪、法69罪

至11坐、明南9罪、No. 74 ⑪竺法護譯

西晉太始二一建興元(A.D. 266-313) ⑫本經は東方なる阿尼彌沙(不胸)世界の、三曼(多)跋陀(普賢)如來の許から來た阿差末(無盡意)菩薩が、舍利弗に對して、菩薩の行業八十に就いて、その不可盡なることを述べたもので、大方等大集經第十二品(無盡意菩薩品)はその異譯である。

始に阿尼彌沙世界の相狀を説いて、其處には三惡道も無く、戒勅を奉ずるもの、禁を犯すものも無く、女人の名をも聞かず、其の土の人民は、根の上下無く、凡て法喜・解義を食とし、文辭を以て法を説くことも無いと云つて居る。此の世界から來た阿差末菩薩が、菩提を發することの無盡であり、所修・修行の不可盡であるを始めて、開示の心・法施・訓誨衆生・積累功德の四行以下、六度、四等、六神通、四恩行(布施・仁愛・利益・等與)四無碍辯、四事(即ち四依)、功德業・法業・慧業、四意止、四正斷、四神足、五根、五力、七覺分、八聖道分、寂然正觀、總持・辯才、無常・苦・非身・寂義の四法、一乘道、善權など、八十項に亘つて、各不可盡なる旨を詳説して居る。經の始に、舍利弗が、何處から來り、國は何處なるを、阿差末に尋ねると、「去來の想有りや」と云ふ。已に想を斷じたり」と舍利弗が答へるので、爾らは何故にかゝる問をば提出したか。來有れば生想を起し、往有れば滅想を爲す、この生と往とを除けば、即ち不起不滅で、是れ即ち聖道である。去來有れば俗に墮する。去來無きを聖道とは云ふ」と云

つて居る。これは阿差末菩薩の立ち場を示したもので、菩薩は是に因つて、八十の不可盡を、諸方面から説いて居るのである。

この經には尙ほ維祇難譯の阿差末菩薩經と、支謙譯の同名の經と、法眷譯の無盡意經とがあつた(開元錄十四)といひ、更に曇無讖の譯もあつた(出三藏記二)といふが、最後のものは、他の經録に見えないので疑はしく、維祇難と支謙との二譯の間には、小異有り(内典錄二)といふが、開元錄では、法眷譯と共に有譯無本の部に掲げてあるもので、當時已に存しなかつたものと見える。

(國譯一切經大集部第一解說參照)

⑦【參考】出三藏記第二、三寶紀第六、内典錄第二、譯經圖記第二、開元錄第二、貞元錄第三、第四 (蓮澤成淳)

阿闍世王 ①(日)A-ja-se-o. ②一卷

③存 ④藤秀瑞著 ⑤大正一一刊 ⑥東京大雄閣

阿闍世王經 ①(日)A-ja-se-o-

gyō. (支)O-shē-shih-wang-ching. (梵)Ajātasattu-kaukrivandana. (藏)Ma-

-khes-dgrahi hgyod-pa bsal-ba. ②11

卷 ③存、大正一五・三八九No. 626、縮字

八、卅九・一〇、北289惟、南191惟、元187

惟、明北170惟、清170惟、麗179恭、天188

惟、指170恭、法176恭、至528效、明南60

惟、N. 174 ④支婁迦讖譯 ⑤後漢建和元

—中平三(A. D. 147—186)

して、遂に未來作佛の決を授くるを骨子とし、之に配するに文殊の智慧・神通と、諸種の說法とを以てした、極めて劇的構想に成つたもので、文殊師利普超三昧經、未曾有正法經、放鉢經など、三本の異譯がある。

諸譯の中、文殊師利普超三昧經のみは品を分つて居るので、以下是を對照しつつ、本經の一斑を見ることにする。初に諸菩薩天子等が、如何にして佛の無極慧を得るやを語り、文殊も一切智を説き(正上品)、次には文殊が佛に化して、菩薩の學・佛の學などを説き、示すに空の法を以てし、更に佛が聲聞の所學と佛の所學などを説かれる(化佛品)。時に諸天子が佛法は極難で佛とは成りたいから、羅漢・支佛に於て泥洹せんとし、一迦羅越となり、鉢に食を満して佛に上る。佛は鉢を地に捨てられると鉢が下方世界に行くので、文殊に命じて取らしめられる(舉鉢品)。次で慧明比丘の物語があつて、今佛の十力四無畏も、文殊の發動する所であり、文殊は正に菩薩の父母であることが説かれ、更に其能勝、大願の二比丘の說話がある(幻童品)。時に阿闍世王が來て、その執道を陳べ、佛に救済を請ふので、文殊が、深妙の法に入れば、汚無く著無く畏無し、吾・我・壽命・人の想を離れて、空・無想・無願なるべき旨を説く(無吾我品)。次で文殊が諸菩薩に、陀隣尼(即ち陀羅尼)を説いて道の元・持法の元であり、是を得た菩薩は、心に持せざる所無く、一切を饒益する、而も陀隣尼は一切諸法に所持無きを示し(總持品)、更に菩薩藏を説い

て、諸法は皆是より出で、一切の道俗・功德・無功德などは皆此の内に入り、持せざる所無く成ぜざる所無きを述べて、三藏と三學とに及び(三藏品)、進んで阿惟越輪を説き、この輪は所轉なく、希望する所無く、而も過く入らざる所なく、悉く諸想を脱するが故に、是を信するもの佛の如くなるべきを述べる(不退轉輪品)。明る日阿闍世王が文殊等を招くと、その食と鉢とに神變が現はれる(變動品)。次で文殊が、諸法は所有・所見なく、想て以て知るべからず、諸法は寂にして吾・我も無く、是でも非是でも無く、諸法はもと泥洹であり、所生も無いといふ様な說法を聞いて、王は疑を解く(決疑品)。王の城門外では、父母を殺したものと、母を殺したものととの間に罪の輕重の争ひがあり、佛は過去の心已に滅し、當來の心は不可説で、現在の心は止住する所無ければ、心は不可見・無形で、而も本來清淨である旨を説かれ、次で阿闍世王の過去世に於ける物語りと未來の記別とが示され(心本淨品)。更に王子梅檀師利が作佛の記を受け(月首受決品)で、終に經の付囑(屬累品)がある。

かくの如く經の中心思想は、飽くまで法の空寂を示す一方、心性本淨の説を掲ぐるにあつて、大乘の諸經論とその軌を一にしてゐるが、未だ、本淨の心性と無明客染との關係交渉にまでは進んでゐないところに、本經の思想的地位が自ら窺はれる。

本經には以上の外、安法欽譯の阿闍世王經、法護譯の更出阿闍世經、羅什譯の阿闍世王經などの三本があつたのが失はれたといふ(開元錄十四)。

⑦【參考】出三藏記第二、三寶紀第四、内典錄第一、譯經圖記第一、開元錄第一、貞元錄第一 (蓮澤成淳)

阿闍世王經 ①(日)A-ja-se-o-gyō.

(支)O-shē-shih-wang-ching. 阿闍世王經

②二卷 ③缺 ④西晉安法欽(一光熙元A. D. 306—)譯 ⑤支婁迦讖譯阿闍世王經と同

本、第三譯、闕本 ⑥【參考】仁壽錄第二、開元錄第一四、貞元錄第二四

阿闍世王子會 ①(日)A-ja-se-o-ti-

ie. (支)O-shē-shih-wang-tā-hui. (梵)Sihha-paripiccha. (藏)……seh-ges shus

pa…… ③存、大寶積經第一〇六(大正一

1 No. 310. 37) ④菩提流志(陳太建四—唐

玄宗開元一五A. D. 752—757)譯 ⑤唐神龍

二—先天二(A. D. 706—713)

①本經は阿闍世王の王子師子の爲に、佛が、

菩薩の行すべき所を示されたもので、法護

譯太子刷護經(太子を刷護に作る)、失譯太

子和休經(太子を和休に作る)は、本經と同

本異譯である。